

(2) 関東地区研究会 (9月23日)

参加者 (順不同) :

牧野修也 (東洋大・院)、斎藤京子 (農水省)、松村和則 (筑波大)、
ガボリオ・マリ (慶大)、熊谷治男 (東農大)、熊谷苑子 (淑徳大)、大内雅利 (明大)、
宮崎俊行 (朝日大)、高山隆三 (明海大)、松岡昌則 (秋田大)

発表者: 大内雅利「農村高齢化とイエムラ理論」

大内会員は、男子農業就労者の構成比から1960年代から一貫して「昭和ひとけた」前半世代が日本農業を支えてきたこと(1995年、21.3%)を「責任を引き受けざるを得なくなった世代」という。このライフコース上の特徴が今日の「農村高齢者問題」の背景にあり、「イエ・ムラの解体」のみが農村高齢者問題を顕在化するものではないと述べて議論を始めた。イエ・ムラ論は生産と生活が一体となっている現実が前提であり、その段階では理論の中に高齢者の「居場所」は見えなかったし、問題として顕在化することはなかった。すなわち、有賀、鈴木、竹内のイエ・ムラ論に今日の「介護期間の長期化という新しい高齢者問題」への視点を見いだすことはできないし、新たな福祉政策(例:介護保健)へは新たな「有償労働組織」論が構築されなくてはならない旨を述べた。

さらに、基本的人権、社会的弱者の保護という普遍思想としての福祉概念は、イエ・ムラ理論とはなじまない。しかし、現実としてイエの系譜性、ムラの農地、定住性というイエ・ムラのミニマム条件は今日でも確認できるが多様な生活主体によって担われる政策が望まれていると結んだ。

【参考文献: 大内雅利「農民のライフコースと戦後農村社会史」『明治大学農学部研究報告』第122号 2000】

発表者：松岡昌則「高齢者と福祉-高齢者の生きがいと地域社会関係-

松岡会員の発表は、基本的に秋田を中心とした東北農村のフィールドワークに基づいてのものであった。高齢者の現実を凝視する立場から「健常から寝たきりまで、生きがい・人間らしさを追求する幅の広い概念」として「福祉」を考えるとという前提に立ち、労働・家族・地域社会の中における望ましい高齢者の生活を展望する。

家族介護、社会的介護（介護保健サービス）の両方に限界があり、地域福祉が補完しなければならないと考える。

1) 介護保険対象サービスも2) 介護保険対象外サービスも楽しく生きがいを持つてのサービスに不十分である。これらのサービスに加えて、「必要な援助」として声かけ、見守り、話し相手、雪寄せ・雪下ろし、買い物、通勤介助（移送以外）、ゴミ出し、入院看護、住居の補修などが日常生活を送る上で必要であり、これらが地域の中で配置されることが重要だと主張された。

伝統的介護意識（親の介護は家族でという）があり、この「責任放棄」への規範を超えて、個別対応の限界に対処するにはムラが組織として機能しなくてはならないという。その背後には、町場への「呼び寄せ同居」に応じた高齢者も「する事がない」「話す人がいない」という現実に直面してムラへ戻っていくという事例があまりにも多く、住み続けることのできるムラを再構成しなければならないと述べた。

【参考文献：松岡昌則「高齢者の生きがいと地域社会関係」『社会学年報』No. 29 2000】

二会員の報告は、ある意味で好対照であった。従来の互惠の論理に則ったイエ・ムラの協同関係は今日の福祉を考える上で限界があると大内会員は考えている。松岡報告は、言うなれば「自前の福祉」を考えていく必要を述べているのに対して、大内会員は制度の福祉を整備していく必要を述べることから報告が発していた。また、大内会員はイエ・ムラ理論は変動を扱うにはそぐわないと考えられているのに対して、生活保障の「基体」としてイエ・ムラを考え、その上に福祉追求の機能を預けようというのが松岡会員の主張であろう。いうなれば、イエとムラの理論を分離し、イエの機能的限界をムラ/ムラ連合が補完する方向へ誘導しようという意図あるように思われ、あくまで自前の「福祉」の必要を主張する報告であったと思う。

イエ・ムラの現実態を巡っての議論も百出して熱気のある研究会となった。宮崎会員は、「自立できなくなったら人間は終わり。公的介護は農村にも必要なのだろうが、公の制度にのみ頼るのではなく自分の力で老後を生きていくのが基本」と議論を締め括った。

（文責：松村和則）